

II. 論 文

メルヴィルの『信用詐欺師』と「もう一つの世界」

小 谷 一 明

And I will give thee and thy sede after thee the land,
wherin thou art a stranger. (Genesis 17: 7-8)

『信用詐欺師』¹が書かれた1857年は、奴隷制度をめぐるアメリカが南部と北部に分裂し、国家を揺るがす南北戦争へと至る過渡期にあたる。南部を中心とした奴隷制度擁護者は、1852年の逃亡奴隷法など奴隷制度維持の体制を押し進めていく。一方で、北部を中心とした奴隷制度反対派は、宗教的な覚醒運動や女権運動と連動しつつ、1854年のカンザス・ネブラスカ法案を一契機に、道徳的観点からの奴隷制度批判を強めていく。

国家と奴隷制度との関わりをめぐる政争は、賛成派も反対派もどのような国家であるべきかということを主要な論点に据えた。国家のあるべき姿を検討するとき、奴隷制度の議論と平行して建国理念の再確認が議論の中心となっていく。国家として抱いてきた理念と、その現在までの連続性が問題となったのである。転機となる1860年リンカーンの大統領就任に至るまで、両派とも現在を、建国理念から逸脱した時代として嘆きつつ、建国の父に対する正当な息子の座をめぐって凌ぎを削ったのである。

サックバン・バーコピッチとマイラ・ジェーレンの編集による『イデオロギーとアメリカ古典文学』は、現在の社会状況を嘆くことで再確認されていく、アメリカ建国理念と「丘の上の町」のシンボリックな場を分析した。19世紀南北戦争以前の政治状況分析においては、現在の問題が台頭してきても、それらが理念の提示から始まるアメリカ合衆国の起源へと参照されていく過程が論じられている。建国理念との比較の中では、現在はその理念的な場から逸脱した時代と認定される。この認定は、現在の状況を過去との関連で再構築し、理念に還元してしまうことでその現在性を奪うことになる。議論の対象であるはずの、現在の事象は背景化され、建国理念の場を再生産する文化言説へと回収されていく。

このような19世紀中葉の現在を生きたハーマン・メルヴィルは、国家再建の

希求をどのように理解していたのであろうか。そして純粹、透明な一貫性のある理念の場へと引き上げられていく国家像に対し、背景化されていく現在をどのようにとらえていたのであろうか。『信用詐欺師』は、アメリカを東西に横断するフィデール号²の世界を描き出すことで、国家的な主題を扱うことを可能にしている。メルヴィルの目に映るアメリカの現実はどうのようなものであったのか、理想とする国家像はどうのようなものであったのか、考察していきたい。

1 分類されない現実と「もう一つの世界」

『信用詐欺師』では、数章にわたりフィクションについての考察がなされている。その章では「作家」が登場し、読者に対し作品論、作家論、登場人物論などを展開していく。メルヴィルの描くアメリカの現実を考察するにあたり、登場人物、作家ならびにフィクションと現実との関わりについて言及している 44 章と 14 章を取り上げてみたい。

44 章では独創的な、そして全く独創的な登場人物と現実の関係が述べられている。第 1 章から主人公のように登場してくる信用詐欺師は、独創的な登場人物としてみなされている。東部からのお尋ね者に懸賞金を掲げる張り紙は、その信用詐欺師を「全く独創的な」人物と描き出す。(1) またハーブ・ドクターを目撃した乗船客は、その信用詐欺師を「悪党であり、愚者であり、天才でもある」「独創的な天才」と呼ぶ。(78) 床屋ウィリアム・クリームが目撃したコスモポリタンも、「全くの独創的な」人物と噂される。(204) 本書に登場する信用詐欺師の別称ともとれる独創的な人物について「作家」は、彼らが、特定の時間、空間の限定を受けていると説明する。(205) さらに、独創的な登場人物も全く独創的な登場人物も、「作家」の「想像力」の産物ではなく、通りで観察された人物であると述べられている。(204-05)『信用詐欺師』の登場人物の大半は詐欺師と推定されうることから、本書は実在の人物を風刺したフィクションと考えられる。この指摘により、ヘレン・トリンビをはじめとする批評家が、『信用詐欺師』の登場人物を主に 19 世紀中葉の実在の人物へと関連づけることになった。実在の人物との照合を模索すると、ニュー・ヨークやボストンなどの主に東部の著名人が登場人物に充当されていく。しかし、「作家」は独創的な人物のもう一つの特徴についても言及している。それは独創的と形容される登場人物が、ドラモンド

光の街灯のように、時代を照らし出すことにあった。(205) 風刺的なカリカチュアを実在の人物にあてはめているだけではなく、こうした登場人物が照らし出す「現実」も、「作家」は考察しているのである。「俗人」をけなし続けるピッチに対し、コスモポリタンが「神よ、私を風刺と皮肉から守り賜え」と叫ぶように、(119)「作家」は風刺を嫌う信用詐欺師を通して照らし出される現実も、描こうとしていたのである。舞台が東部のみならず西部にまで広がっている点を考慮に入れるならば、『信用詐欺師』が個人的な風刺ばかりでなく、国家的な時代状況をも風刺していると考えられる。

では独創的な登場人物によって照らし出される現実とはどのようなものであるのか。「作家」は14章で、あるビーバーの剥製の話を持ち出し、現実と認識の問題について考察している。オーストラリア産の、アヒルの嘴を持つビーバーの剥製が初めてイギリスへ持ち込まれたとき、博物学者はこの生物を存在しないと「分類」する。

When the duck-billed beaver of Australia was first brought stuffed to England, the naturalists, appealing to their classifications, maintained that there was, in reality, no such creature; the bill in the specimen must needs be, in some way, artificially stuck on. (59)

このように、博物学者の経験で捕捉できない生き物は、たとえ目の前に標本が置かれていても「そんな生き物はいない」と断定されてしまう。「現実」が、「分類」³という認識の枠組みによって構成されているのである。このビーバーは分類という知の体系から外れているため、現実のものではないと認定される。また、このビーバーの挿話の後で紹介される「プロクルステースのベッド」(61)（無理矢理に押しつける体制、主義）も、「分類」という現実を示す。フィデル号の吊りベッドを指す言葉であるが、乗船経験のない「新参者の移民」や「貧乏な移民」は、このベッドから転げ落ちてしまう。「貧乏な旅行者を嘲弄する敵」大工によって、このベッドは作られた。移民は人体に合わせてベッドを選ぶことができず、ベッドに合わせて体を伸縮しなければならない。このベッドが設置されている「移民者地区」は、暗闇の中に設置されており、(61) 台帳を持つ男のよ

うに中に入ろうとしない限りは認識されることのない場である。

このように認識されない、分類されない存在が語られる一方、語り手の知覚の限界も提示される。しかしフィデール号の目撃者たらんとする語り手は、全知の語り手であるという偽装を行っている。語り手も博物学者や大工の様に、経験の限界を認識の枠組みで処理する。例えば、最初に登場する信用詐欺師の場面で、語り手は自らの語りの限界を露呈する。クリーム色の服を着た男が「慈善」を訴えた後、甲板の片隅で居眠りをし始める。看板を掲げて登場したときも、彼は「その時と場にそぐわない」人物であったが、寝姿も他の乗船客にとっては奇妙な光景となる。謎めいた寝姿の男に乗船客は興味を抱き、多様な形容辞をあてはめていく。矛盾対当する形容辞が投げつけられたり、「考え出され」たりするのは、乗船客がこの居眠りをしている男の登場場面を「目撃していなかった」からだ、と語り手は述べる。(5) この時点までは、語り手もその群衆に交わり、眠りこけている男を目撃し、形容辞を投げつけていたと考えられる。しかし次第に乗船客が奇妙な男の観察に飽き、その場を離れ始めると、同じように語り手も彼の視線をその男から離していく。語り手はいつクリーム色の服を着た男が起きあがったのかに気づかない。気づいたときには、寝ていた場所にその男はいないのである。

[T] he last transient memory of the slumberer vanished, and he himself, not unlikely, waked up and landed ere now — the crowd, as is usual, began in all parts to break up... involuntarily submitting to that natural law which ordains dissolution equally to the mass, as in time to the member. (6)

この語り手は、全知の語り手ではない。語り手も、この船上で繰り広げられる「仮面舞踏劇 (masquerade)」(217) に参加しているため、乗船客同様、観察に飽きたら視線を外すのである。そして、「自然の法則」などを頼りにしながら、話しが「考え出され」ていくのである。頼りにならない語り手ではあるが、最後まで信用詐欺師を追いかけて、信用詐欺師が暗闇に隠れるまで追跡していく。しかし最後の語り手の言葉「さらにこの仮面舞踏劇といったものは続いていくだろう」からもわかるように、最後まで語り手は、目撃できる範囲の限界とそれを補うで

あろう推測を提示していくのである。目撃の限界は、自然の法則や乗船客（さらに読者）が納得できる想像力によって包み隠されていくのである。

ところが語り手による目撃の提示は、一貫性のない事実の集積を招いている。とりわけ登場人物の目撃描写においては、「作家」自ら、一貫した性格が浮かび上がってこないと告白している。例えば商人ロバートは、性格が「齟齬をきたしている (inconsistent)」人物として述べられている。信用詐欺師が黒人ギニーに扮した場面では、ロバートの人を疑わない性格が示される。この性格は、喪章を付けている男の話しを聞く場面と台帳を持つ男から株を購入する場面では、一貫性のあるものとして保たれている。しかしワインを飲みはじめると、台帳を持つ男の予測に反し、それまでの温厚で善良な性格を裏切る発言をし始める。この予期せぬロバートの性格の変化に対し、「作家」は読者に説明を与える。「ロバートは性格に齟齬があると考えられるかもしれない、まさに彼はそうなのだろう。しかしだからといって、この齟齬を作家の責任に転嫁してよいのだろうか」と述べる。(58)そして、この人物における矛盾した性格こそが、むしろ実世界の姿を写實的に描いたことの証である、と「作家」は主張するのである。(59)

「作家」の言葉どおりに、ロバート以降も性格に「齟齬」をきたした登場人物が現れる。コーネル・マードックの話しにおいても、マードックは、「自己矛盾 (self-contradicting)」(132)をはらむ人物として紹介される。マードックは矛盾しないインディアン・ヘイターとなるため、イリノイ州知事候補の野心を捨てる人物であった。(135)しかし彼のインディアンに対する態度と家族に対する態度のあまりの相違から、フランクはマードックの性格とその話しに対する不信を表明せざるをえない。フランクにとってこの話しは信じられないものであり、でっちあげられたものか、過度に飾りたてられたものである。(136)しかしこの性格の齟齬こそが、「人道主義精神」が進展する「合併株式会社と自由気ままの時代」が作り上げたものであった。「キリスト教化」とともに「親切運動」が進展する今、「優しい絞首刑執行人」など「新種のモンスター」が登場するだろうと、フランクは語る。実際、ピッチやチャーリーが「無愛想な博愛主義者」、「優しい人間嫌い」と暗示されるように、「新種のモンスター」は既に現れている。(154)フランク自身はこうしたモンスターを自己矛盾した人物とみなしていないが、「作家」は統一性のない性格を有する人物こそ、同時代の産物ととらえている。

このように語り手が目撃する世界は、語り手の意図に反し、分類の枠組みでは把握できない新しい時代を照らし出す。そして自己矛盾した人物に目を向ける「作家」とは対照的に、「劣った作家たち」は、この語り手のように「透明性」のなかで登場人物を「再現する」ことを試みる。

[L]esser authors, some may hold, have no business to be perplexing readers with duck-billed characters. Always they should represent human nature not in obscurity, but transparency, which, indeed, is the practice with most novelists. (59)

「劣った作家たち」は、分類できない登場人物、「アヒルの嘴を持つ登場人物」を扱おうとしない。彼らは、分類できる登場人物だけを「再現する」ことに勤しむ。齟齬をきたすような筋立てでも、彼らは最後にうまく「つじつまを合わせる」ことができる。「作家」はこうした「劣った作家」と一線を画す。彼は齟齬をきたす事実をそのままにしておくことで、分類から外れ、存在を奪われたビーバーを救い取ることを目指すのである。筋立てや語り口、登場人物に一貫性がなくとも、「作家」はその現実が書き込まれることを望んでいる。それゆえ「作家」は読者にある程度の忍耐を期待する。読者が単に娯楽性のみならず、「現実の生活が示しうる以上の現実」をフィクションに求めることを、「作家」は期待するのである。(158) この「現実」は、「もう一つの世界」と呼ばれるものである。

In this way of thinking, the people in a fiction, like the people in a play, must dress as nobody exactly dress, talk as nobody exactly talk, act as nobody exactly acts. It is with fiction as with religion: it should present another world, and yet one to which we feel the tie. (158)

フィクションが、日常とは異なる世界を題材にすると述べる時、このテキストは日常の文化コードから洩れ出る世界を描くことになる。経験において立ち現れる対象物を、そのまま「提出する (present)」ことを目指すのである。「劣った作家たち」のように現実の世界を「再現する (represent)」のではない。再現

するということは、透明性のなかで現実を写し出そうとし、分類されない現実を破棄してしまうことになる。現実と繋がっている「もう一つの世界」を提出することは、一貫性を欠いた断片的な世界を描き出すことになるが⁴、アヒルの嘴を持つビーバーを救出できる世界を照らし出すことになる。

2 現実を構成する信条と語り口

このように、「作家」は現実と「現実の生活が示しうる以上の現実」という二つの現実を提示しようと考えている。分類から洩れ出る「現実」に対し、「分類」により構成されている世界が現実として理解されていることを指摘している。この章では妻ゴネリルとチャイナ・アスターの話しを中心に、これらの話しがどのように分類され、そして現実が構成されていくかを考察してみたい。これにより、ビーバーの例で示された分類の枠組みが、より具体的に浮かび上がると思われる。

12章で展開される「不幸な男」（ゴネリルの夫であり喪章を付けた男）の話しは、喪章を付けた男から証人ロバートが聞いた話しであり、ロバートが台帳を持つ男に話したものである。この話しは妻ゴネリルの容姿、性格の描写から始まっている。彼女は、矛盾した容姿、性格を持ち、実像を想像しがたい人物となっている。簡単に要約すると、ゴネリルは白人女性と思われるが、インディアン女性のような容姿をしている。化粧によって遠目からは美しく見えるが、接近するとひげが目についてくる。彼女は美しいとも言えるが、それはサボテンのような美しさである。レモンと青い棒キャンディーを好物にしているが、棒キャンディーを人前で食べる姿は、彼女の品行を疑問視させる。おとなしい女性と見なすこともできるが、彼女は昼の三時まで寝ているのである。異性に対する愛想が良く好印象を与えるが、しばしば度を超して密かに相手の体を触るようなことがある。

語り手は、その「奇妙な性質」と「異教徒的なタブー」を犯す振る舞いから、ゴネリルを「一つの謎 (an enigma)」ととらえている。(51-52) 夫は結婚に際し永遠の誓いを立てた手前、それを破るつもりはないのだが、次第に妻への信用を失っていく。そこで夫は、妻が他の男性に行う性的なしぐさを遠回しに非難する。しかし妻はそれを理解しないばかりか、逆に夫の妄想としてとらえ苦言を呈する始末である。しばらくすると妻は、どのような種類のものかは説明されていないが、嫉妬の感情を抱きはじめる。その苛立ちを娘に向けはじめたため、父と

して娘を守らなければという思いから、不幸な男は娘を連れて「国内の放浪 (domestic exile)」に赴く。娘を遠ざけられた妻は、女権運動家とともに夫を提訴し、娘、夫の財産そして名声までも奪い取っていく。夫は「ミシシッピー河の溪谷をさまよう無法者」となり果てるが、最近新聞で妻が死んだことを知り喪章を付ける。

ロバートは不幸な男の話しに驚愕し、不幸な男への同情を示している。この話を聞いた台帳を持つ男も驚きを示すのであるが、ロバートのように夫の肩を持つとはしない。反対に、妻をもっと信頼すべきだったのだと言う。信頼を欠いたために、不幸が訪れたのであって、この経験が今では素晴らしい教訓になっているはずだと論ず。つまり、喪章を付けた男は、人類に信頼を置くことの重要性を改めて認識しているに違いないと、台帳を持つ男は考えているのである。

こうして台帳をもつ男により、不幸な男についての話しは悲話ではなく、教訓話しへと変えられていく。さらに台帳を持つ男は、ゴネリルに対する夫の忠告の与え方が悪かったと指摘する。喪章を付けた男は妻に対し理屈を使って話した。女性の扱いに長けていないのであろうが、夫は「もっとずっとまことしやかな (persuasive) もの」(55) で話すべきだったと述べる。しかしこの「まことしやかな」論法は、台帳を持つ男の話し方への、自己言及となっている。ロバートの考え方は、「博愛主義に対する、まさに明らかなる、異論 (dissuasives) とみなされるもの」であった。(54) それに対し台帳を持つ男は、まことしやかな「哲学的、かつ人道主義的な語り」でもって、(54) ロバートの「異論」を変更させようとしたのである。もし喪章を付けた男の経験が単なる不幸なものでしかないとすると、「何の益もない厄災の存在を認めること」になり、「ある人々にとっての最も重要な信条 (persuasions) を不当に歪めることになる」と台帳を持つ男は考えている。(55) 台帳を持つ男の説得により、「心の底から」ロバートは意見を変え、台帳を持つ男に同意を示す。この一見円満な同意に対し、語り手は一石を投じている。「信心深さと同様に、物わがりの良い人間だったので」ロバートはこの意見に従わざるをえなかったのだ、と横やりを入れるのである。(55)

こうした語り手の態度は、「哲学的、かつ人道主義的な語り」に対する抵抗を示す。異論をかき消していく「まことしやかな (persuasive)」信用詐欺師の語り口に対し、語り手は沈黙を保てない。ロバートが台帳を持つ男に承伏していく

場面で、語り手は次のように語る。

Because, since the common occurrences of life could never, in the name of things, steadily look one way and tell one story, as flags in the trade-wind; ... (55)

語り手の意見は、提出された複数の意見をまとめあげようとするものの見方、語り方に反抗するのである。台帳を持つ男は不幸な男の話しを「透明」さの中で再現しようとするのだが、語り手の横やりにより、「信条」と「異論」が統合されない不透明な場が示される。「最も重要な信条」でもって異論を抑え込むことは、「分類」を振り回しビーバーの存在を認めようとししない博物学者と同じ態度である。「分類」が現実を構成しているように、この「最も重要な信条」と「まことしやかな」語り口も現実を構成しているのである。

この語り口に対する語り手の抵抗には伏線があった。語り手が、「不幸な男の話し」を伝えようとするロバートの語り口を奪い取る場面である。ロバートのゴネリルの夫に対する共感が、この話しに不公平な扱いをすることを語り手は危惧している。

But as the good merchant could, perhaps, do better justice to the man than the story, we shall venture to tell it in other words than his, though not to any other effect. (26)

引用からわかるように、語り手は、不幸な男の話しと不幸な男のどちらにも不平等にならないような語り口を目指している。「それ以外の効果」のためではない。ものの見方を常に一方向だけに限定することのないように、話し方も一方向だけを向くことのないように、注意が払われている。信用詐欺師の「人道主義的な語り」もロバートの語りも、語り手は「不幸な男の話し」を公平に伝えていないと退ける。しかし語り手は、果たして不幸な男の話しと喪章の男の両方を、偏りなく扱うことができたのであろうか。「不幸な男の話し」においては、語り手は公平無私な立場を強調しているが、現実を構成する「まことしやかな」語り口

に抵抗できているのであろうか。あるニュー・オーリンズの老人の話しを、義足の男がけちな老人と灰色のコートを着た男に語る場面がある。ここでは先の場面と異なり、公平さを欠いた語り手の姿をうかがい知ることができる。

灰色のコートを着た男がけちな老人とギニーについて話しをしていると、義足の男は、二人の背後から笑い声をあげて（再）登場してくる。なぜ笑っているのかと不審に思う二人に対し、たまたま二人の会話を聞いて（盗み聞きして）ある話しを思い出し、おかしくなって笑ったのだと義足の男は答える。ギニーに扮していたときに義足の男の冷笑を体験していた信用詐欺師は、ここで再び義足の男が皮肉をこめて笑っていると判断する。義足の男はニュー・オーリンズの年老いたフランス人の話しを始めるが、果たしてこの判断を裏打ちするかのように「風刺的な」描写、刺々しい言葉に包まれた話しであった。そしてこの話しを語り手が繰り返し語る際に、語り手は一言つけ加える。信用詐欺師の判断に共鳴しているかのように、語り手は義足の男からその刺々しい語り口を奪う決意を示すのである。

Whereupon, in his porcupine way, and with sarcastic details, unpleasant to repeat, he related a story, which might, perhaps, in a good-natured version, be rendered as follows: ... (26)

「繰り返すのも不愉快な」話しを「善良版」で語り直す態度には、義足の男の話し「風刺的な」細部を骨抜きにしようという意図がうかがえる。不幸な男の話しにおける語り手が、信用詐欺師の「まことしやかな」語り口に距離を置くことにに対し、この「善良版」で語る語り手は、「人道主義的な語り」を振り回す信用詐欺師と同列にいる。義足の男の話しに対し、灰色のコートを着た男の反応は、語り手と全く同じものである。

“Who is he, who even were truth on his tongue, his way of speaking it would make truth almost offensive as falsehood? Who is he?” (26)

語り手と同じように灰色のコートを着た男も、義足の男の話し方が、「真実を、

嘘のように、ほとんど腹正しい」ものにしていると感じている。不幸な男の話において、公平無私な態度を取ろうとしている語り手ではあるが、この場面では灰色のコートを着た男の見解に何の抵抗も示してはいない。むしろ語り手も、灰色のコートを着た男と同様に、腹ただしい「真実」を注ぎ込む語り口を好まないのである。信用詐欺師の「真実」拒絶の態度に関しては、ピッチが「真実は恐怖よりも驚きを生み出す」だけで、「真実特有の功德が推察されない」と信用詐欺師を批判している。(95) ピッチの批判はこの語り手の態度にも適用されるものである。また、所望していたものとは異なる事実が示されたときの、読者の「嫌悪感」とそれを「理解することへの戸惑い」が「作家」により言及されているが、(58) 語り手の態度にはこの「嫌悪感」がうかがえる。

このように義足の男の話しに対する態度においては、語り手が不幸な男の話しにおいて示したような、話しの提示における公平さへの配慮が欠落していることがわかる。語り手による「善良版」の語りは、信用詐欺師の「人道主義的な語り」同様に、風刺的な細部を取り除こうとしている。ここで確認されることは、「最も重要な信条 (persuasions)」に対して異論を提示することの、抵抗し続けることの難しさである。この難しさは一体どこから生じるものなのか。「善良版」の語り口がなぜ一貫した抵抗を許さない力を持つ語り口となりえるのか。「チャイナ・アスターの話」は、支配的な言説の持つ力を描き出している。

チャイナ・アスターの話しは、友人オーチスを「自由気ままに信用するよう、説得され (persuaded)」(189) たことで、アスターが破産に追い込まれる話である。宝くじで大儲けしたお節介屋のオーチスは、蝋燭屋のアスターに事業を拡大するよう助言し、お金を貸そうとする。断り続けたが、夢に現れた「天使」、「ある美しい生身の博愛主義者」のヴィジョンに鼓舞され、借りるつもりがなかったお金を新事業に投資してしまう。(183) 古臭い訓辞を振り回す駄弁じいさん、合いの手役の分別じいさんは、借金などするなと助言してくれたが、アスターは老人をしつこい借金取りと勘違いし、遠ざけてしまう。結局「助言に反して (persuaded against)」(189) 投資を重ね、アスターは借金を増やしていく。最後には、債権者に法的な利子のみならず、慣習としての利子の支払いも要求され、アスターは破産し、死んでしまう。

彼の死後、アスターの愚直ともいえる誠実な人柄を高く評価する町民によって、

アスターの記念碑（墓碑）を建てようという運動が起こる。心身共に窮した際、アスターが書き残した手記が、墓碑の文面にあてられる。アスターは、死後その手記が墓碑に刻まれることを願っていた。しかし、経費削減のため駄弁じいさんは文字数を減らし、文面を短くする。しかし墓碑に刻まれた文面は、町の話題となる。記念碑を建てる運動を企図した「資本家」（189）（アスターから抵当により借金を取り立てることに成功した人物）は、駄弁じいさんがアスターの手記を改竄し、感傷的な「悲話（a jeremiad）」（189）に仕立て上げたと厳しく批判する。こうした周囲の反響をよそに、「分別じいさん」は後書きとしてもう一行「すべての根幹には親友からの借金があった」を付け加える。（190）アスターの誠実さを讃えたい町民と、彼の悲話から教訓を導き出そうとする町民の間の議論からは、アスターの手記がどのような文面であったかを推測することはできない。

このように、アスターは手記において内面の感情を吐露したのだが、その文面は他の町民への教訓となっていく。資本家が期待した文面は、アスターの愚直さを讃える楽観的な教訓であった。一方、駄弁じいさんたちが作り上げた文面は、悲観的な教訓であった。どちらの文面も、アスターの手記をそのまま受け入れるつもりはない。資本家により非難された駄弁じいさんさえも、アスターの手記が「ためになる教訓」になることを期待している。（188）アスターの個人的体験の目撃者である資本家も道徳家も、その体験を共有しようとしたとき私的文章の改竄を図る。そして改竄された文面が、アスターの個人的体験を伝えるとされる記念碑に書き込まれる。記念碑が語るアスターの体験は、アスターが社会から「疎外（estrangement）」（190）された窮境を繰り返す。アスターの感傷的な語り口を、道徳的な語り口によって疎外していくのである。

アスターの記念碑は、道徳的な語り口の、私的な語り口に対する優位を示す一つの指標となる。しかし私的な語り口の敗北は、アスターの夢の中に博愛主義の天使が忍び込んだと語られる時点で、すでに予測されうるものである。夢の中に現れた博愛主義者がアスターに借金を踏み切らせた時点で、人道主義的な語りはすでにアスターの手記を取り囲んでいる。個人の体験を語ることは、夢の中に入り込んでいる博愛主義を語ることになり、個人的な体験は公的な体験へと容易に回収されうる。駄弁じいさんは、アスターの冗長すぎる文面を短くしただけであった。駄弁じいさんが、冗長と判断した文面がどのようなものか知る由はないが、

こうした作業だけでアスターの手記は教訓へと変貌してしまう。

語り手が人道主義的な語りに対して置こうとした距離も、義足の男の話しにおいて明らかなように、すでに語り手から奪い取られている。「善良版」の「善良 (good-natured)」という言葉は、騙されやすいほどお人好しの、という意味を併せ持つ。語り手は、「まことしやかな」語りに対峙できるという錯覚に陥っているが、対峙以前に人道主義的な語りは語り手を騙している。語りは常に語り手の意図を裏切っているのである。

3 「もう一つの世界」とユートピア

人道主義的な語りは、それに抵抗する以前に、抵抗しようとする者の中に深く入り込んでいる。ジャン・クリストフ・アグニューは、『信用詐欺師』がバフチン的なカニヴァレスクの舞台を作り上げているが、決してそのダイアログが権威を転覆させ、マルクスのように新たなユートピアを提示するところには至っていないと述べている。(Agnew, 202-03) しかし「資本家」と道徳家に代表される社会を変革、再構築するヴィジョンは持てなかったものの、メルヴィルは権威に対する抵抗への足がかりは示そうとしている。ジェームズ・カバナーも指摘するように、抵抗とは、支配的な文化言説から最終的には逃れられないという意識があるものの、支配的言説に対しそれとは異なる言説を再評価していくことで表す態度である。(Kavanagh, 356-57) これまで考察してきた複数の語りは、最終的に支配的な語りへと回収されてしまっているが、不幸な男の話しにおける語り手の異論や、チャイナー・アスターの話しにおける明かされることのない手記の沈黙は、最終章で一つの抵抗する言説の再評価へとつながっていく。それと同時にメルヴィルは、支配的な語りがその説得力を失う状況も描き出している。メルヴィルの生きた19世紀のアメリカで横行する「偽エレミヤ」(41)の語る悲話において、その支配的な語りが抵抗の火種を含んでいることをメルヴィルは描き出している。悲話は、現在を過去からの逸脱とし、未来の「至福千年王国の約束 (the millennial promise)」(36)を待望するが、メルヴィルはこの悲話を使った商売の失敗をとおして抵抗の足がかりを垣間見させてくれるのである。最終章における抵抗への提言とつながる、信用詐欺師が不動産商売で失敗した例を考察してみたい。

灰色のコートを着た男は、ユートピア⁵の地「ザ・ニュー・エルサレム (the New Jerusalem)」を学生に売り込むため、その地を地図で示す。しかし学生には「水たまりの場 (the water-lots)」、実際には何もない土地にしか見えない。(43) 灰色のコートを着た男によると、不動産取引の場として提示される約束の地は、立派なライシイアムの壇上を持つ。この地は、生地を追われカナダへと逃亡したモルモン教徒が、ミネソタ北部のミシシッピー河沿いに建設したものであると説明されるが、学生は地図上にその地名を読みとることができない。結局この不動産の商売は失敗に終わってしまう。悲話を用いて商売を行う偽エレミアの失敗は、商売相手を説得するための重要基盤である共通のヴィジョン、ユートピア幻想、を若者が持っていなかったためである。このユートピアの地をめぐる語りが説得に失敗するとき、どこにもない場として分類される「もう一つの世界」たるアメリカが浮かび上がってくる。

灰色のコートを着た男には見えるユートピアの地が、若き学生には見えないとされる話しには、アメリカにおける至福千年王国到来への不信の一例が提示されている。しかしこの話しで注目されることは、灰色のコートを着た男の語りの中に、説得失敗の火種が表出していることである。それは、このユートピアの地が、自由の国であるはずのアメリカで、自由を求め逃亡したモルモン教徒によって建てられたという信用詐欺師の口上に見出される。自由の国で自由を求めるという同語反復的なテーマへの言及は、若き学生に不信を引き起こすものとなるであろう。アメリカにおける至福千年王国の建設が、アメリカからカナダに渡り、そこから泳いで渡ってきた逃亡者により作られるという風刺を、風刺を嫌う人道主義的な語りが含まみこんでしまっているのである。内容的にも、灰色のコートを着た男が用いる語りは、ユートピア言説の非ユートピア性を露呈しているのである。

語り手を裏切る語りは、現実のみならず、それを背後で構成する「もう一つの世界」を提示する。この提示によって、浮かび上がる乱立する言説の場を、メルヴィルはアメリカとして提示しようとしている。本書では第一章から、その複数の全く異なった言説が一つの舞台を埋め尽くしていく。お尋ね者の張り紙、クリーム色の服を着た男による「コンリント人への手紙」からの引用、床屋の「つけ無し」という告示は、それぞれが信用というテーマをめぐる全く異なった三つの言説であるが、それらが一堂に会するのである。第一章に呼応する形で、最終章に

においても三つの異なった言説が現れる。そしてこの三つの言説は、一つの書物の各部分であることが暗示されている。フォスターが注釈で示しているように、(206) モーゼの祭壇が示す旧約聖書、キリストのような後光を戴く人形が提示する新約聖書、床屋の主人に初めてその存在を教えられた聖書外典が、一冊の「真実の書」に収められている。信用詐欺師は、外典は明らかに「偽経 (uncanonical)」(209) なのだから、「真実の書」から分離されるべきだと言う。この外典を聖書として認めたくないとする信用詐欺師であるが、彼が学生に聖書の引用をする際、フォスターが指摘しているように、聖書外典中の「ベン・シラの知恵の書」を想起させる引用をしている。“There is a subtle man, and the same is deceived.” (23) 床屋の前では外典の存在を知らなかったと言う信用詐欺師であるが、彼の語りの中にこの外典は入り込んでいるのである。メルヴィルによる最終章のキャノンについての考察は、外典がキャノンを支えているという洞察がうかがえる。この点で、メルヴィルには文学キャノンの分類から洩れ出る言説を再評価しようとする姿勢が見受けられる。ヒューストン・ベイカーの言葉を借りるなら、様々な言説が「カタログ」的に堆積している場 (Baker, 151) こそが、メルヴィルの理想とする言説の世界、アメリカ、である。メルヴィルは、「もう一つの世界」まで含みこむ「真実の書」をアメリカの現実として理解するよう提言したのである。

注

- 1 Herman Melville のテキストは *The Confidence Man: His Masquerade*. Ed. by Hershel Parker. NY: Norton, 1971. を使用した。引用はすべてこの版による。このテキスト以外の引用は、全て参考文献からのものであり、引用に際しては、著者名を付しておく。
- 2 フィーデル号は、セミノール寡婦及び孤児の収容施設基金を呼びかける灰色のコートを着た男によって、「キリスト教会社」(77) という呼称を与えられている。一方、義足の男が戦闘的なキリスト教徒と群衆に向かって言い放つように、この船は「愚者の船」(12) と呼ばれる。この二つの呼称を総合するかのようになり、語り手は、この「忠実」を意味する名前を持つ船を名工匠「ダイダロスの作った夢のようなボート」(65) と呼ぶ。この語句からは、美しい夢のような船の意と夢 (沈没) へと向かう船、の両方の意味が推測される。ダイダロスは、イカロスの翼やクレタ島のラビリンスを作った工匠であった。
- 3 ジョン・ブライアントは、『信用詐欺師』の分類を最大の問題として考えている。彼は、

『信用詐欺師』に関わる最大の問題は、この作品が教訓的なものとして分類されるのか、模倣的なものとして分類されるのか、喜劇的寓意（風刺）なのか、それとも人間の愚かさの表象なのか、である」と述べている。(319)『信用詐欺師』が分類を拒む作品であるのは、「分類」自体を問題化した作品だからである。

- 4 この一貫性のない世界の提出は、読者を失う危険性のある試みでもある。それゆえメルヴィルは、読者への呼びかけを前面に押し出す。「作家」は想像裡で、読者の「声」を聞きながら、(157) 読書を助けるための施しも行うのである。(54)
- 5 マーク・ウインサムがエグバートをフランクに紹介する場面で、ウインサムはフランクに、エグバートの「穏健なユートピア主義的理想主義 (soft Utopainisms)」(170) を理解して欲しいという。ソフトという言葉には、金の儲かる、詐欺的な意味もある。この時代のユートピア幻想に対する、メルヴィルの風刺を読みとることができる。

参考文献

- Agnew, Jean-Christophe. *Worlds Apart: The Market and the Theater in Anglo-American Thought, 1550-1750*. Cambridge: Cambridge UP, 1989.
- Baker, Houston A. "Figurations for a New American Literary History" in *Ideology and Classic American Literature*. Ed. by Sacvan Bercovitch and Myra Jehlen. Cambridge: Cambridge UP, 1986, 145-72.
- Bercovitch, Sacvan. *The American Jeremiad*. Madison: U of Wisconsin P, 1978.
- Blumin, Stuart M. *The Emergence of the Middle Class: Social Experience in the American City 1760-1900*. Cambridge: Cambridge UP, 1989.
- Bryant, John, ed. *A Companion to Melville Studies*. Greenwood P, 1986.
- Kavanagh, James H. "That Hive of Subtlety: 'Benito Cereno' and the Liberal Hero" in *Ideology and Classic American Literature*. 352-84.
- Pease, Donald E. "Melville and Cultural Persuasion" in *Ideology and Classic American Literature*. 384-418.
- Robertson, Andrew W. *The Language of Democracy: Political Rhetoric in the United States and Britain, 1790-1900*. Ithaca: Cornell UP, 1995, 68-96.
- Trimpi, Helen P. *Melville's Confidence Men and American Politics in the 1850s*. Hamden, Conn.: Shoe String P, 1987.
- 福岡和子. 『変貌するテキスト ; メルヴィルの小説』. 英宝社, 1995.